

聖イグナチオ教会 2022年3月21日 四旬節黙想会 2022

グローバルな視点から見た希望の扉

デ・ルカ・レンゾ

1、主に助けを求める

マタイ 8:23-27 イエスが舟に乗り込まれると、弟子たちも従った。

そのとき、湖に激しい嵐が起こり、舟は波にのまれそうになった。イエスは眠っておられた。弟子たちは近寄って起こし、「主よ、助けてください。おぼれそうです」と言った。イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。信仰の薄い者たちよ。」そして、起き上がって風と湖とお叱りになると、すっかり風になった。人々は驚いて、「いったい、この方はどういう方なのだろう。風や湖さえも従うではないか」と言った。

2、アジア・パシフィック イエズス会の司牧計画を参考に

目指していること

主において全てのものを新たに見ながら、回心と協働性の道を歩みたい。急務としてアジア・パシフィックでの貧困さと自然との和解に関わる。特に若者、教会、他宗教と似た関心を持った社会の人々との共働を目指す。イグナチオの霊性は私たちが頂いた分かち合うべき贈り物であり、それを基に成長したい恵みである。

3、教皇の言葉

“Let Us Dream” The Path to a better Future (2020)

時々、私たちの前にある挑戦を見て圧倒されます。しかし、落胆することがありません。共にいる方が居ます。隔離が強いられ、苦しさや無力さ、恐怖さえを味わいます。しかし、それにこの危機から良くなるチャンスがあります。

主は使い捨てではなく、奉仕の文化を求めています。しかし、他人の現実に関心がなければ、奉仕することができません。たどりつくため、目を開け、他人の苦しみが自分に触れることをゆるし、聖霊が境界から語って下さることが聞こえますように。

教皇フランシスコ回勅『兄弟の皆さん』 “Fratelli Tutti”

242 肝心なのは、そうするのは怒り-個人の魂やわたしたちの民としての魂を駄目にしてしまうものをかき立てるためでもなく、あるいは相手をたたきのめし、それによって復讐の連鎖を終わらせようとする病的な執着のためでもないということです。そのような方法で、内なる平和や過去との和解を実現できる人はいません。事実、「いかなる家庭、いかなる地域コミュニティ、いかなる民族集団、ましてや、いかなる国にとって、団結させ、結束させ、違いを乗り越えさせる原動力が復讐と憎悪であるならば、未来はありません。わたしたちは復讐のため、自分がされたのと同じ暴力を相手に振るうため、一見すると正当なやり方で報復の機会を画策するために、声を合わせ、団結するわけにはいきません」。そうして得られるものは何もなく、結局は、何もかも失うことになるのです。

250 ゆるすとは、忘れることではありません。むしろ、どうにも否定しきれない、客観視できない、消し去ることのできないものがあつたとしても、それでもゆるすことができる、といたいのです。いかにしても許容しえない、納得できない、目をつぶるわけにはいかないことがあるとしても、それでもゆるすことはできるのです。何があろうとも忘れてはならないことがあるとしても、それでもゆるすことはできるのです。自由意志によって、ゆるすことは偉大で、神のゆるしのはかりしれなさを映しています。ゆるすことが見返りを求めないものであるならば、悔い改めを拒み、ゆるしを請うことができずにいる人をも、ゆるすことができるのです。

268 すべてのキリスト者と善意ある人々は、合法・非合法を問わず、あらゆる形態の死刑を廃止すべく闘うよう、またそれだけでなく、自由を奪われた人の人間としての尊厳を守り、刑務所の環境改善のためにも闘うよう求められています。そしてわたしは、これを終身刑と関連づけます。終身刑はひそかな死刑なのです」

聖イグナチオたち列聖 400 年記念ミサでの教皇フランシスコの説教

兄弟姉妹よ、十字架の上昇のみが、栄光に到達する道です。これが、「十字架から栄光へ」という道です。この世の誘惑は、十字架を迂回して栄光を求めようとすることです。私たちは、慣れ親しんだ、真っ直ぐで滑らかな道を好みますが、イエスの光に出会うためには、絶えず自分を置いて、上へ上へとついていかなければなりません。私たちが聞いたように、最初に「アブラハムを外に連れ出した」（創世記 15 : 5）主は、私たちにも外へと上へと向かうよう招いておられます。

人間の本性の敵は、空虚ではあるが快適な日常生活や見慣れた風景の道に留まるよう説得しますが、聖霊は私たちを開放と、決して安らぐことのない平安へと駆り立てます。イエスは弟子た

ちを極限まで送り込みます。私たちはフランシスコ・ザビエルのことを考えていれば参考になります。

この旅において、この道をたどるにあたって、私は闘争の必要性を考えます。可哀想なアブラハムが、生贄と一緒に、それを食い荒らす猛禽類を撃退している姿を思い浮かべてください（創世記 15:7-11 参照）。杖で鳥を追い払ったのです。哀れな老人です。このことを考えましょう：この道、この旅、この、私たちの主への奉獻を守るために奮闘しているのです。

いつの時代も、キリストの弟子たちは、この岐路に立たされます。私たちは、ペテロが「イエスの出エジプト」の予言に対して、「ここにしよう」（33 節）と答えたような態度をとることもできます。これは静的な信仰、「きちんと駐車している」信仰のリスクです。私はこのような「停まっている」信仰を恐ろしく思います。自分では「立派な」弟子だと思っても、実際にはイエスに従っておらず、受動的にじっとして、気づかないうちに、福音書の弟子たちのように居眠りをしてしまう危険性があるのです。ゲッセマネでも、同じように弟子たちは眠ってしまうのです。兄弟姉妹の皆さん、イエスに従う者にとっては、今は眠っている時ではなく、今日の消費主義的、個人主義的文化によって、「自分さえよければいい」という態度によって、魂を鎮静化、麻酔化させる時なのだと考えようではありませんか。そうすることで、私たちは兄弟姉妹の肉体と福音の具体性を見失ったまま、語り続け、理論化することができるのです。現代の大きな悲劇のひとつは、現実を目を向けることを拒否し、その代わりに別の方向に目を向けてしまうことです。

祈りのために

1. 希望を持って生きていますか
2. 問題があるときに神様を頼りにしていますか。
3. 赦すことができますか。赦す体験を思い起こしましょう。
4. 周りの人々に希望をもたらしますか。